

## 熱海の捜索隊を支える漁港の氷 暑さ対策「ありがたい」

山下寛久 2021年7月17日 12時24分



氷を受け取る浜松市消防局職員=2021年7月13日午前9時19分、静岡県熱海市網代、山下寛久撮影

静岡県熱海市 伊豆山で起きた土石流の現場では、30度近い暑さのなかで、行方不明者の捜索が毎日続いている。17日で発生から2週間。消防や自衛隊でつくる捜索隊の熱中症予防に、市内にある網代漁港の氷が活躍している。

現場では16日も、各地の自衛隊、警察、消防合わせて約1千人態勢で捜索が行われた。静岡地方気象台によると、伊豆山の同日の最高気温は27.4度。暑さ対策として、温度計で気温や湿度を把握し、一定時間で隊員を交代させるなどの対策をとっているという。

暑さとたたかいながら、必死の捜索を続ける現場を支えているのが網代漁港の氷だ。港には日産5トンの製氷機が置かれ、常時20トンの氷を備蓄している。市が熱中症対策用の氷の調達先を探していたところ、港を管轄するいとう漁業協同組合網代支所が快諾。10日から供給が始まった。

港には連日捜索隊が訪れ、氷を現場に運んでいる。隊員の体や飲み物を冷やすのに使われるという。13日に氷を受け取りに来た浜松市消防局の担当者は「隊員の熱中症対策は非常に重要。提供してもらえるのは助かります」と感謝の言葉を口にした。

網代支所と製氷機メーカーの「アイスマン」(福岡県久留米市)は共同で、計10トンの氷を無償提供する。根本雅典支所長(60)は「氷によって活力を得て、捜索活動に力を入れてもらいたい」と話した。

気象台によると、熱海市付近は今後1週間も連日30度前後の日が続く予報で、熱中症に注意が必要だ。担当者は「重装備で作業している方が多いので、水分補給や、交代ができるような態勢の構築が重要だ」としている。(山下寛久)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.